

対抗しようとしながらも、混乱状況から抜けきれないことが描かれる。澤江論文は、企業活動に焦点を当てる。一九九〇年代に活性化したトルコの「イスラーム主義企業」が、国家主導の経済政策に頼らずむしろ国際的な企業経営を志向している点が興味深い。小林論文は、インドネシアの大統領も務めたアブドゥルラフマン・ワヒドの著作を分析し、彼が多宗教国家の多元性を維持しながらイスラームを社会的倫理として定着させるよう模索してきたことを論じている。

終章の小杉論文は、ヒジュラ暦によつて現代の「イスラーム世界」を俯瞰し、無前提な西暦の使用を相対化する。その上で、「開明的イスラーム派」が今後果たしうる役割を強調している。

付章の充実した現代イスラーム思想家列伝は、各章の執筆者を含む多くの専門家によって書かれており、従来の事典・辞典類を補完するものとして貴重である。

本書の注目すべき点の一つは、二十世紀ないしヒジュラ十五世紀の「イスラーム復興」を広い視座で検討し、中国・東南アジ

ア・中央アジアなどの諸地域、及びマイノリティ諸勢力、企業やNGOの活動までをも対象にしていることである。加えて、その潮流を十九世紀末まで遡って考察していくことが、本書の随所で試みられている現在から未来への展望にも深みを与えている。緻密な実証研究に基づき現在進行中のテーマを扱った本書は、永く研究者に参照されることになる。

(佐藤尚平)

アダルベール・アマン著

東丸恭子(上)・印出忠夫(下)訳

『アウグスティヌス時代の日常生活』(上)(下)

リトン B6 (上) 二〇〇一・六刊
(下) 二〇〇一・一刊

三〇八頁 三四〇〇円
三八〇頁 三七〇〇円

歴史学者P・ブラウンによる浩瀚な伝記第二版の邦訳(教文館、二〇〇四)も上梓された。このような研究現状の中には、本書はどのような位置を占めることができるのだろうか。

一九七九年に公刊された原著は、パリのアシェット社による著名な叢書「日常生活」の一冊をなす。一九一〇年に生まれた著者は、ラテン教父著作の校訂に加えて、多数の教父学ならびに神学に関する研究書や論考を著している。本書の全体は、「序論」、四世紀から五世紀にかけての北アフ

二〇〇四、を参照)。とりわけ、神学もしくは哲学活動に対する考察は膨大であり、それに対応するアウグスティヌス著作の翻訳も相当数公刊されている。加えて、C・ドーソン編による論集(筑摩書房、一九六九)も、H・チャドウェイックによる古典的記述(教文館、一九九三)も、H・I・マルニーによる伝承史研究(サンパウロ、一九九四)も、R・A・マーカスによる精緻な思想分析(教文館、一九九八)すら、日本語で読むことができる。昨年には、アウグスティヌス研究を根底から変えたと言われる

リティ諸勢力、企業やNGOの活動までをも対象にしていることである。加えて、その潮流を十九世紀末まで遡って考察していくことが、本書の随所で試みられている現在から未来への展望にも深みを与えている。緻密な実証研究に基づき現在進行中のテーマを扱った本書は、永く研究者に参照されることになる。

(佐藤尚平)

ドーソン編による論集(筑摩書房、一九六九)も、H・チャドウェイックによる古典的記述(教文館、一九九三)も、H・I・マルニーによる伝承史研究(サンパウロ、一九九四)も、R・A・マーカスによる精緻な思想分析(教文館、一九九八)すら、日本語で読むことができる。昨年には、アウグスティヌス研究を根底から変えたと言われる

新刊紹介

100(四二)

リカの日常生活を復元した「第一部 人びとの生活と環境」(全七章)、同地域におけるキリスト教社会の動向を跡づけた「第二部 キリスト教共同体」(全六章)、ローマ帝国における教会の位置を考察する「第三部 教会と国家」(全三章)、そして「結論」と構成されている。各章の詳細に関しては、すでにキリスト教史家による批判的かつ周到な書評があるので(山田望、『上智史学』四七巻、一〇〇一、「一八五九」頁)、ここでは本書記述の全体に関わる特徴を紹介したい。

それは、本書は狭い意味でのアウグスティヌスという一教父の伝記ではなく、表題が示すようにアウグスティヌスが生きた時間と空間の社会史である、という点である。ここで言う時間とは「古代末期」であり、空間とは「属州アフリカ」である。「古代末期」が地中海的古代から大陸的中世への変容期間であることは、多数の古代史家ならびに中世史家による専門研究と総合記述によってすでに共通の理解となりつてある。とりわけ本書が対象とする時代は、テオドシウス帝によるキリスト教国教化、

帝国統治組織の東西分割、アラリックによるローマ劫略という劇的な事件の継起する時代であり、それに加えて「属州アフリカ」では、司教による秘蹟の権威をめぐるドナティスト問題が沸騰していった時代でもある。著者は、『告白録』、『三位一体論』、『神の国』に代表される哲学的もしくは神学的著作からのみならず、現在に伝承している彼の手になる書簡や説教からも縦横無尽に証言を引き出すことによって、アウグスティヌスの生きた時間と空間を私たちの眼前に彷彿とさせることに成功している。

また、文献史料に加えて、著者自身による北アフリカの踏査経験や物質資料からの情報が叙述に深く組み込まれている点も、記述に説得性と生彩をいや増させている。

惜しむらくは、原著公刊時にはまだ知られてはいなかつたが、本書のテーマに直接関わる情報を提供する、いわゆる「ディヴィジヤック書簡集」と「ドルボー説教集」が利用できなかつた点である(両史料に関してはP・ブラウンによる伝記の巻末に詳細な分析がある)。しかしながらそれを差し引いたとしても、滋味豊かな本書の叙述か

ら古代末期の北アフリカの日常生活を、さらにアウグスティヌスの個性と著作群を育んだ諸条件を私たちは十分に彷彿できるのではないか。二つの新史料を咀嚼した成果を生み出すのは次世代の課題であろう。

本書は以上のような特徴を持つ、おそらく日本語で読むことのできる唯一の研究書である。それゆえに、冒頭に挙げた全ての研究とともにこれからも併読され続けるだけの価値ある研究であると言つてよいのではないかだろうか。最後にもう一点だけ付言しておきたい。写真、地図、索引、原書脚註(文末註や章末註ではない)、訳註は簡潔ながらも要を得たつくりとなつており、訳文も癖がなく読みやすい。そういう点にも両訳者の利用者に対するこまやかな配慮を感じ取ることのできる良書であることは強調されるべきであろう。(小澤 実)